（様式１）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	北海道	番号	０１

推進地区名	協力校名	児童生徒数
根室市	根室市立北斗小学校	３２６

○　実践研究の内容

１．推進地域における取組

(1) 本実践研究を適切に行うための推進体制

本事業関係者や学校力向上に関する総合実践事業（注１）の管理職、ＰＴＡ関係者等で構成した「学力向上推進協議会」を開催し、推進地区及び協力校に対する指導助言や本実践研究の成果等の検証を行った。

・第１回学力向上推進協議会：平成 30 年 11 月 15 日（木）

・第２回学力向上推進協議会：平成 31 年　２月 27 日（水）

(2) 推進地域としての支援策

①　学習指導の充実に向けた指導助言

・協力校に対して、平成 30 年度全国学力・学習状況調査結果で明らかになった課題を踏まえた検証改善サイクルの確立に係る実践事例を示すなど、課題解決の具体的な取組を支援した。

・協力校に対して、身に付けさせたい力に応じた適切な言語活動の位置付けや児童が学習が見通しをもち、主体的に学習に取り組めるよう、授業の冒頭における学習課題の提示や学習課題と正対したまとめを行うこと、学習課題の質の向上を図ること、終末の場面におけるまとめや振り返りを位置付けることなど、授業改善の促進を働きかけた。

・学校全体での学習環境の整備・充実に関わり、学習規律の徹底やノート指導の統一、ＩＣＴの積極的な活用に係る実践事例を示すなど、課題解決の具体的な取組を支援した。

②　検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築に向けた指導助言

・推進地区、協力校に対して、「平成 30 年度全国学力・学習状況調査　北海道版結果報告書」及び全国学力・学習状況調査の調査結果を詳細に分析することができる「分析ツール北海道版」（注２）を提供し、調査結果に基づく分析資料の作成を支援し、協力校の学力向上に係る課題を明確化した。

・北海道独自の問題「ほっかいどうチャレンジテスト」（注３）を「北海道学力向上Ｗｅｂシステム」（注４）で配信し、分析結果から児童一人一人のつまずきを把握し、課題の解決に向けた取組が促進されるよう働きかけた。

③　家庭や地域との協働関係構築への支援

・保護者や地域住民と課題を共有した学力向上に関する取組の推進に向け、「平成 30 年度全国学力・学習状況調査　北海道版結果報告」及び「分析ツール北海道版」を提供し、全国学力・学習状況調査の分析結果や改善方策、学力及び生活リズムに関する明確な数値目標などを設定できるようにした。

④　推進地区及び協力校への指導助言の充実

・協力校に対し、指導主事による学校訪問を充実し、授業参観及び指導内容・指導方法等について協議し、具体的な改善方策を示した。（延べ７回訪問）

２．推進地区における取組

(1) 学習指導の充実

①　思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業改善

・協力校に対し、定期的に学校教育指導主幹が訪問し、授業改善に係る指導助言を行った。

②　学習規律の徹底及び基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る取組

・発達の段階に応じて、低・中・高学年で学習規律を設定し、指導の徹底に取り組むとともに、教員だけではなく児童と共通理解を図り、板書と関連付けたノートづくりを行うよう指導助言を行った。

(2) 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築

①　各種調査結果等を活用した検証改善サイクルの確立

・道教委が作成した「分析ルール　北海道版」等を活用した全国学力・学習状況調査の詳細な分析、全国学力・学習状況調査や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」等の結果分析を踏まえた授業改善について指導助言した。

②　教員の指導力向上に向けた取組

・指導力の向上に向け、実践的な研究を推進するよう指導助言した。

・先進地域への視察の成果として、大館市内全小学校が共通して取り組んでいる学びの基本ツールや備えるべき教師力、学習過程の統一などの具体的な取組について校内研修等で還元するよう指導助言した。

３．協力校における取組

(1) 学習指導の充実

①　思考力、判断力、表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の実施

・児童の思考力・判断力・表現力等を育むため、国語科「読むこと」の指導において、単元において身に付けさせたい力を明確にし、適切な言語活動を位置付けるとともに、単元の流れや学習活動を示した「学びのガイド」を活用し、児童に単元や単位時間における学びの見通しをもたせ、学びの進捗状況を教師と児童で共有した。

②　実物投影機等のＩＣＴの活用による指導の充実

・国語や算数の他、図画工作や音楽などの授業において、課題や資料の提示、児童の考えの発表等、学習の目的や内容に応じて、実物投影機を積極的に活用した。

③　学習規律（ノート指導を含む）の徹底

・発達の段階に応じて、低・中・高学年で学習規律を設定し、指導の徹底に取り組んだ。
・教員だけではなく児童と共通理解を図り、板書と関連付けたノートづくりを行うとともに、その成果を児童が確認する機会として、本校独自のノート検定を実施した。

④　指導方法工夫改善加配を活用した個に応じた学習による指導方法等の工夫

・個に応じた指導の充実に向け、算数科において、第１、２学年で、ティーム・ティーチングを中心に行い、第３学年から第６学年で、習熟度別少人数指導を実施した。

⑤　放課後や長期休業期間等を活用した効果的・計画的な補充学習の充実

・放課後において、単元テストで目標点に及ばなかった児童への再テストの実施、学習内容の定着に課題の見られる児童への学級担任や学年付教員（指導方法工夫改善加配等）による個別指導の実施などを行った。
・長期休業において、各学期の最終週を「学期の復習期間」とし、国語・算数（中学年以上は社会・理科を含む）を中心にした復習の機会を設定した。

⑥　授業内容との関連を図った家庭学習の工夫改善

・低・中・高学年で家庭学習の決まりや取組方法について設定するとともに、各学年の学習に応じて家庭学習の内容を示した手引を家庭に配付するなど、家庭と連携した学習習慣の確立に取り組んだ。

(2) 検証サイクルを基盤とした学校組織の構築

①　道教委が作成した「分析ルール　北海道版」等を活用した全国学力・学習状況調査の詳細な分析

・教務担当教員、研修当教員、高学年の学級担任が「分析ツール　北海道版」を活用して全国学力・学習状況調査児童の結果について分析し、無解答率や誤答率、下位層の児童の学習状況等を基に本校の課題を明確にした。
・全教職員で重点的に指導すべき単元や指導方法・指導体制について協議し、共通理解を図り授業改善に向けて取り組んだ。

②　全国学力・学習状況調査や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」等の結果を踏まえた授業改善の実施

・ＣＲＴ標準学力検査や「ほっかいどうチャレンジテスト」について、教務主任を中心に結果を分析し、成果と課題を明らかにするとともに、授業改善の方向性を示した。
・課題を踏まえ、授業において、児童が自分の考えを発表したり、友達と考えを交流したりする場面、課題の設定や振り返りの場面を適切に位置付けるなど、指導方法や指導体制の工夫・改善を図るとともに、重点単元を設定した。

③　教員の学習指導力向上のための校内研修の実施

・指導力向上に向け、国語科「読むこと」を軸にした研究主題・研究内容を設定し、全教員が授業公開を行い、実践的な研究を推進した。
・各種研修会への参加を奨励し、キャリアステージに応じた研修の推進に努めるとともに研修報告を行うなど、研修成果の還元に努めた。
・先進地域への視察の成果を校内研修において還元するなど、指導力の向上に努めた。

○　実践研究の成果

１．協力校における取組の成果

(1) 全国学力・学習状況調査による検証

①　教科調査結果

・国語Ａ・Ｂ、算数Ｂの平均正答率が全国を上回った。算数Ａと理科では、全道の平均正答率と同程度であった。

・無解答率については、多くの設問において全国平均を下回っており、粘り強く取り組む姿勢が定着してきていると考えられる。

・記述式の設問について、昨年度と比較して正答率が上昇しており、授業において課題や解決方法、まとめや振り返りを書く活動を重視していることが成果として現れていると考えられる。

・児童質問紙調査においては、「家で宿題を行っている」「自分で計画的に学習している」の質問について「そう思う・どちらかといえばそう思う」と回答した児童の割合が前年度と比較して高くなっており、家庭での学習習慣について定着が図られてきていると考えられる。

(2)　標準学力検査、ほっかいどうチャレンジテストによる検証

①　チャレンジテスト経年比較

・全道平均を 100 として前年度と比較すると、現在の第６学年については向上したものの、その他の学年では全道との差が開く結果となった。

・国語では、特に、問われていることに対して示された条件を意識して書く設問の正答率が落ち込んでいる。また、算数では、「大きな数の計算」「分数の意味の説明」「例示を基にした計算の仕方の説明」「素数の意味」「台形の面積の求め方の理解」に課題が見られた。

(3)　学校評価、児童アンケート及び教員アンケートによる検証

①　児童による授業評価（満点 4.0）

・学期末に児童による授業評価を実施しており、12 月の評価から⑦「授業において実物投影機等を活用しているか」の項目を新設した。児童の評価は 3.3 で、他の項目と比較して落ち込んでいる。

・他の項目に関しては全ての項目において 3.5 を上回っており、どの項目においても７月と比較して向上が見られた。

②　保護者による学校評価（満点 4.0）

・12 月実施の学校評価アンケートでは、各項目において概ね昨年度同様の評価結果であった。

・新設した「話し合いの場面等自ら課題解決する活動の導入」「授業と関係のある家庭学習の提示」の項目については、それぞれ 3.38 と 3.33 と、概ね満足できる結果であったが、他の項目と比較すると低い状況であった。

③　教師による自己評価（満点 4.0）

・「管内教育推進の重点マネジメントシート」を活用して教職員の自己評価を実施しており、12 項目中９項目（うち 3.0 以上が７項目）において、平成 30 年４月から平成 31 年

１月にかけて評価が高くなっている。

・９月より新設した、ＩＣＴの活用やティーム・ティーチングの有効活用、補充的な学習等の項目については、取組を推進したことにより教員の学力向上に向けた気運が高まってきている。

２．実践研究全体の成果

○　定期的な学力向上推進協議会の開催や継続的な学校訪問を行ったことにより、推進地域、推進地区、協力校代表者等での取組の進捗状況、成果や課題の共有や、推進地区及び協力校に対するきめ細かな支援を行うことができた。

○　協力校による公開研究会（実践発表会）を実施したことにより、推進地区及び協力校の取組の成果等を広く普及することができた。

○　各種調査等の結果の分析により、成果と課題を明らかにするとともに、言語活動の充実や学習規律の統一などに取り組むことができた。

３．取組の成果の普及

○　公開研究会等を開催し、学力向上の取組や成果を普及した。

①　「第１回北海道学力向上推進協議会」（平成 30 年 11 月 15 日（木）、参加人数：23 名）

内　　容：全学級授業公開、今年度の取組についての説明及び協議

会　　場：根室市立北斗小学校

参加対象：北海道学力向上推進協議会委員、北海道教育委員会担当者

②　「根室市立北斗小学校実践発表会」（平成 30 年 12 月８日（土）、参加人数：68 名）

内　　容：全学級授業公開、特設授業公開、今年度の取組についての説明

会　　場：根室市立北斗小学校

参加対象：北海道学力向上推進協議会委員、北海道教育委員会担当者、根室市教育委員会担当者、市内幼稚園、小・中学校教職員等

③　「第２回北海道学力向上推進協議会」（平成 31 年２月 27 日（水）、参加人数：22 名）

内　　容：全学級授業公開、先進地域・先進校視察報告、今年度の取組についての説明及び協議

会　　場：根室市立北斗小学校

参加対象：北海道学力向上推進協議会委員、北海道教育委員会担当者

○　今後の課題

・検証改善サイクルの確立や学校組織の構築などの本実践研究の取組の成果を、平成 31 年度全国学力・学習状況調査等の結果から検証する必要がある。

・全国学力・学習状況調査問題や「平成 30 年度全国学力・学習状況調査　北海道版結果報告書」、「授業アイディア例」（国立教育政策研究所）等を積極的に活用し、授業改善を推進する必要がある。

・「ほっかいどうチャレンジテスト」を繰り返し活用し、児童一人一人の課題を踏まえ、学習内容の確実な定着を図る取組を継続的に進める必要がある。

・各種調査結果等に基づき、数値目標を設定するなどして、目的を明確にして取組を推進するとともに、確実な検証により取組の改善を図っていく必要がある。
・推進地区及び協力校の取組の成果を域内の小・中学校と共有し、域内の各学校において、学力向上の取組の充実を図る必要がある。
・推進地区及び協力校の取組をＷｅｂページで紹介するなど、成果を普及する必要がある。

（注１）「学校力向上に関する総合実践事業」
・管理職のリーダーシップの下で学校改善を推進することにより、当該校から将来のスクールリーダーを輩出する新たな仕組を構築するため、道教委が指定する実践指定校において実施している事業
・平成 24 年度から実施

（注２）「分析ツール　北海道版」
・各市町村や学校が、自らの結果を詳細に分析できるよう、レーダーチャート、下位層の状況、学校間のばらつきなどのデータが簡単に作成できるツール
・平成 24 年度から継続して作成

（注３）「ほっかいどうチャレンジテスト」
・各学校や家庭において学力向上や学習習慣の改善に日常的に取り組めるよう、学期ごとの学習内容や、本道の児童生徒が苦手としている内容等を踏まえた国語、算数・数学、理科、社会の問題
・平成 21 年度から継続して作成し、道教委Ｗｅｂページに掲載

（注４）「北海道学力向上Ｗｅｂシステム」
・チャレンジテストの集計・分析の時間短縮及び全道・管内と比べた自校の基礎学力の状況の把握が行えるシステム
・集計結果に基づき、子どものつまずきに応じたきめ細かな指導や放課後等の補充的な学習サポートの充実などに生かすことが可能
・平成 24 年度から使用

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	北海道	番号	０１

推進地区名	根室市

○　推進地区として実施した取組内容

１．研究課題

(1) 学習指導の充実

・思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業改善

・学習規律の徹底及び基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る取組

(2) 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築

・各種調査結果等を活用した検証改善サイクルの確立

・教員の指導力向上に向けた取組

２．研究課題への取組状況

(1) 学習指導の充実

①　思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業改善

・協力校に対し、定期的に学校教育指導主幹が訪問し、授業改善に係る指導助言を行った。

第１回：平成 30 年６月 28 日（木）

（内容）基礎・基本の確実な定着を図る課題の提示や振り返りの在り方に関する指導・助言

第２回：平成 30 年 11 月８日（木）

（内容）思考力・判断力・表現力等を育む言語活動を位置付けた授業改善に係る指導・助言

第３回：平成 30 年 12 月８日（土）

（内容）実践発表会における研究成果に係る指導・助言

・２月上旬に市内全小・中学校でＣＲＴ標準学力検査を実施した。今後、検査結果を基に、根室市学力向上プロジェクト推進会議において分析を行い、授業改善に向けた取組について検討する。

②　学習規律の徹底及び基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る取組

・発達の段階に応じて、低・中・高学年で学習規律を設定し、指導の徹底に取り組むとともに、教員だけではなく児童と共通理解を図り、板書と関連付けたノートづくりを行うよう指導助言を行った。

(2) 検証改善サイクルを基盤とした学校組織の構築

① 各種調査結果等を活用した検証改善サイクルの確立

道教委が作成した「分析ルール　北海道版」等を活用した全国学力・学習状況調査の詳細な分析、全国学力・学習状況調査や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」等の結果分析を踏まえた授業改善について指導助言した。

② 教員の指導力向上に向けた取組

指導力の向上に向け、実践的な研究を推進するよう指導助言した。

また、先進地域への視察の成果として、大館市内全小学校が共通して取り組んでいる学びの基本ツールや備えるべき教師力、学習過程の統一などの具体的な取組について校内研修等で還元するよう指導助言した。

３．実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査結果について

平成 30 年度全国学力・学習状況調査において、小学校の国語Ａは平成 29 年度に比べ全国及び全道との差が縮まっており、「根室市確かな学力向上に関する取組方針」に基づく「学び方」の日常的なチェックによる学習内容の定着と学習規律・生活規律の「基礎・基本」の徹底を図った成果が表れていると考えられる。

４教科の平均正答率は、小学校は 54.0、中学校は 58.8 であり、全国及び全道の平均正答率に達することができず、平成 29 年度に比べ全国及び全道との差が広がっていることや、小・中学校ともに、全ての領域において全国及び全道を下回っていることから、学力向上に向けた取組の推進が重要となっている。

児童生徒質問紙調査では、「家で、自分で計画を立てて勉強をしている」と回答した割合が全国及び全道を上回っており、各学校において、全教職員で家庭学習の課題の与え方について共通理解を図り取組を推進したことにより、児童生徒が家庭で自ら計画を立てて勉強する習慣が定着してきていると考えられる。

(2) 標準学力検査、ほっかどうチャレンジテストについて

① チャレンジテスト経年比較

	H29	北斗	全道	全道比	H30	北斗	全道	全道比
現1年					1年国語	9.1	8.4	108.3
					1年算数	8.9	9	98.9
現2年	1年国語	8.3	8.3	100.0	2年国語	2.2	2.4	91.7
	1年算数	10.2	10.1	101.0	2年算数	6.4	7.1	90.1
現3年	2年国語	5.5	5.5	100.0	3年国語	3.1	3.7	83.8
	2年算数	8.5	9.1	93.4	3年算数	7.5	9.4	79.8
現4年	3年国語	6.7	7	95.7	4年国語	3.6	4.4	81.8
	3年算数	10.2	10.8	94.4	4年算数	8.9	9.5	93.7
現5年	4年国語	6.4	7.2	88.9	5年国語	7.5	8.8	85.2
	4年算数	9	10.7	84.1	5年算数	7.5	10.3	72.8
現6年	5年国語	11.4	12.3	92.7	6年国語	8.2	8.4	97.6
	5年算数	10.7	11.3	94.7	6年算数	11.7	12.1	96.7

協力校においては、「チャレンジテスト学年末問題」における正答率の経年変化について、全道平均を 100 として前年度と比較すると、現在の第６学年については向上したものの、その他の学年では全道との差が開く結果となった。国語では、特に、問われていることに対して示された条件を意識して書く設問の正答率が落ち込んでいる。また、算数では、「大きな数の計算」「分数の意味の説明」「例示を基にした計算の仕方の説明」「素数の意味」「台形の面積の求め方の理解」に課題が見られた。

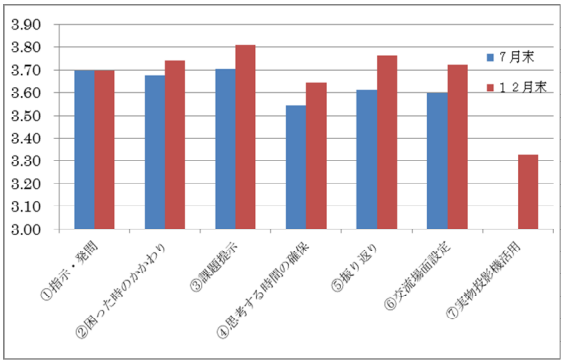
今後は、当該校が設定している「重点指導単元」等の取組について、市内小学校に普及していくとともに、家庭と連携を図りながら、家庭での学習習慣の定着について指導助

言していく。

(3) 学校評価、児童アンケート及び教員アンケートについて

① 児童による授業評価（満点 4.0）

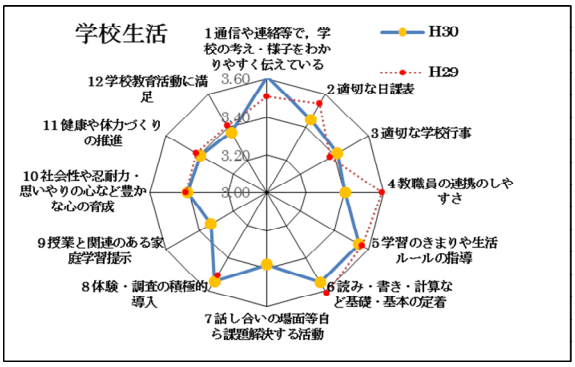
協力校で、学期末に行っている児童による授業評価においては、全ての項目において７月と比較して向上が見られる。



② 保護者による学校評価（満点 4.0）

協力校において、12 月に実施している学校評価アンケートでは、各項目において概ね昨年度同 様の評価結果であった。

本事業の指定を受け、新設した「話し合いの場面等自ら課題解決する活動の導入」「授業と関係のある家庭学習の提示」の項目については、概ね満足できる結果であったが、他の項目と比較すると低いため、今後は、授業参観等における対話的な学習の実施や、家庭学習につながる授業の終末の在り方等について、さらに工夫・改善を加え、保護者への情報発信を強化していくよう指導助言していく。



③ 教師による自己評価（満点 4.0）

協力校においては、「管内教育推進の重点マネジメントシート」を活用し、教職員の自己評価を実施している。

	具体的項目	H30.4	H30.9	H31.1
（1）	学校経営方針やグランドデザインに基づく学力向上に向けた組織的な取組の改善・充実により、	2.96	3.08	3.20
	学力に関わる数値目標等の達成を図る。	2.54	2.79	2.70
（2）	各種調査等の結果から課題が明らかとなった領域の繰り返し指導や毎時間の学習の振り返り活動により、	2.84	2.88	3.20
	基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	2.67	2.75	2.80
（3）	目的を明確にした話し合う活動や各教科等の特質に応じた言語活動の充実により、	2.80	2.96	3.10
	思考力、判断力、表現力等を高める。	2.54	2.71	2.70
（4）	子どもが見通しをもって学習に取り組むことができる目標提示により、	3.16	3.38	3.40
	学習意欲を高め、主体的に課題解決に取り組む態度を育む。	2.88	2.96	3.20
（5）	教職員の共通理解を図った指導の充実により、	3.40	3.42	3.60
	一貫した学習規律の徹底を図る。	3.04	3.29	3.50
（6）	家庭や地域と連携した学力向上の取組により、	2.80	2.92	2.90
	目安の家庭学習時間等の達成を図る。	2.50	2.63	2.70
９月より新設	(1)授業では、わかりやすい授業となるよう、実物投影機などICTを活用している。		2.79	3.15
	(2)授業では、加配教員を効果的に活用して個に応じた志度の充実が図られている。		3.21	3.26
	(3)放課後や長期休業期間を活用した効果的・計画的な補充学習を行っている。		2.79	2.84

多くの項目において、平成 30 年４月から平成 31 年１月にかけて評価が高くなっており、取組の成果が見られる。また、本事業を踏まえ、９月より新設した、ＩＣＴの活用やＴ・Ｔの有効活用、補充的な学習等の項目についても、取組を推進したことにより教員の学力向上に向けた気運が高まってきている。

今後は、児童の姿としての成果を十分に感じられるよう、先進地を視察した教員による研修成果の還元等から、より一層、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るとともに、思考力・判断力・表現力を育むことを目指した授業改善を推進していくよう指導助言していく。

４．今後の課題

(1) 学校組織の強化

○　全教職員による全国学力・学習状況調査等各種調査結果の詳細な分析

○　校内及び校外研修のさらなる活性化を図るための組織体制の整備

(2) 教員の授業力向上

○　児童への題設定や見通しのもたせ方等、個々の教員の授業デザイン力の向上

○　全校での学びを支える学習規律の徹底を図る。

○　平成 31 年度も先進地の視察を実施するとともに、市内の教員に対し成果報告会を実施するなど、教員の授業力向上に繋げる取組の充実を図る。

(3) 基礎的・基本的な学習内容の確実な定着

①　計画的な習熟度別少人数指導の充実など個に応じた学習による指導方法等の工夫

②　放課後や長期休業期間等を活用した補充学習の充実

③　授業内容との関連を図った家庭学習の工夫改善

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成３０年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	北海道	番号	０１

協力校名	北海道根室市立北斗小学校

○　協力校として実施した取組内容

１　当初の課題

本校は３年前から国語科の「読むこと」領域に焦点を当て校内研修に取り組んでおり、平成29 年度の全国学力・学習状況調査の国語Ａにおいて全国平均を上回るなどの成果が見られている。しかし、国語Ｂにおいて、全国平均を 7.5 ポイント下回るなど、発展的思考の育成についての課題が明らかになった。算数科においては、最近の３年間で、全国平均を 4.7 ポイントから 7.9 ポイント下回っている。標準学力検査の理科や社会科においても、それぞれ、6.7 ポイントから 9.7 ポイント、1.5 ポイントから 5.1 ポイント全国平均を下回っており、各教科において発展的思考の育成はもとより、基礎的・基本的な知識・技能の習得にも課題が見られる。

また、平成 29 年度の全国学力・学習状況調査児童質問紙調査では、「先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思いますか。」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。」の設問において肯定的な回答をした児童の割合がそれぞれ、2.8 ポイント、9.9 ポイント全国平均を下回るなど、主体的・対話的で深い学びの姿勢に課題が見られる。

さらに、学習指導については、力量のある教員の指導方法が全体に浸透しなかったり、全国学力・学習状況調査の結果の分析が学級担任任せになっていたりするなど、組織的な人材育成や授業改善の取組について課題が明確になっており、全国的な水準まで児童の学力を底上げするために、カリキュラム・マネジメントの視点からの学校組織の構築が急務である。

２．協力校としての取組状況

(1) 学習指導の充実

① 思考力、判断力、表現力等を育む言語活動を位置付けた授業の実施

児童の思考力・判断力・表現力等を育むため、国語科「読むこと」の指導において、単元において身に付けさせたい力を明確にし、適切な言語活動を位置付けるとともに、単元の流れや学習活動を示した「学びのガイド」を活用し、児童に単元や単位時間における学びの見通しをもたせ、学びの進捗状況を教師と児童で共有した。

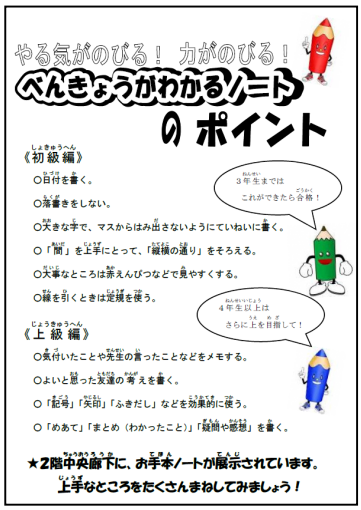
② 実物投影機等のＩＣＴの活用による指導の充実

国語や算数の他、図画工作や音楽などの授業において、課題や資料の提示、児童の考えの発表等、学習の目的や内容に応じて、実物投影機を積極的に活用した。

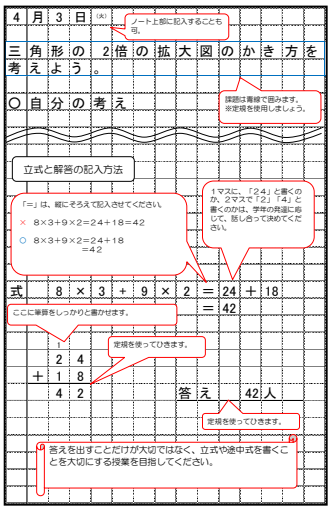
③ 学習規律（ノート指導を含む）の徹底

発達の段階に応じて、低・中・高学年で学習規律を設定し、指導の徹底に取り組んだ。

また、右の図のように、教員だけではなく児童と共通理解を図り、板書と関連付けたノートづくりを行うとともに、その成果を児童が確認する機会として、本校独自のノート検定を実施した。



【ノートづくりのポイント】



【算数科のノートづくりのポイント】

④ 指導方法工夫改善加配を活用した個に応じた学習による指導方法等の工夫

個に応じた指導の充実に向け、算数科において、第１、２学年で、ティーム・ティーチングを中心に行い、第３学年から第６学年で、習熟度別少人数指導を実施した。

⑤ 放課後や長期休業期間等を活用した効果的・計画的な補充学習の充実

放課後等に、学習内容の確実な定着を図った。

・単元テストで目標点に及ばなかった児童に対して、再テストを実施
・学習内容の定着に課題の見られる児童に対して、学級担任や学年付教員（指導方法工夫改善加配等）による個別指導を実施
・各学期の最終週を「学期の復習期間」とし、国語・算数（中学年以上は社会・理科を含む）を中心にした復習の機会を設定

⑥ 授業内容との関連を図った家庭学習の工夫改善

低・中・高学年で家庭学習の決まりや取組方法について設定するとともに、各学年の学習に応じて家庭学習の内容を示した手引を家庭に配付するなど、家庭と連携した学習習慣の確立に取り組んだ。

(2) 検証サイクルを基盤とした学校組織の構築

① 道教委が作成した「分析ルール　北海道版」等を活用した全国学力・学習状況調査の詳細な分析

教務担当教員、研修当教員、高学年の学級担任が「分析ツール　北海道版」を活用して、

全国学力・学習状況調査の結果について、無解答率や誤答率、下位層の児童の学習状況等を基に分析を行った。その結果、算数Ａにおいては、「１あたりの大きさを把握する」「円周率を求める」「百分率を求める」、国語Ａにおいては、「話を組み立てる」「主語と述語に着目して文章を書き直す」「敬語を適切に使う」といった内容に課題が見られた。その後、全教職員で「少数のわり算」や「１あたり量」など、重点的に指導すべき単元や指導時数等について協議し、共通理解を図り授業改善取り組んだ。

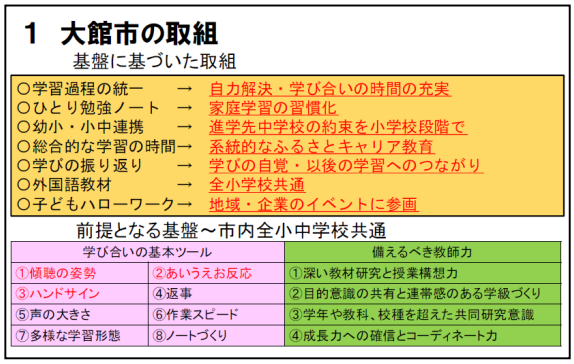
② 全国学力・学習状況調査や標準学力検査、「ほっかいどうチャレンジテスト」等の結果を踏まえた授業改善の実施

ＣＲＴ標準学力検査や「ほっかいどうチャレンジテスト」について、教務主任を中心に結果を分析した。その結果、「示された条件を意識して自分の考えを書くこと」や「自分の考えについて根拠を明らかにして説明すること」などの内容で課題が見られた。そのため、授業において、児童が自分の考えを発表したり、友達と考えを交流したりする場面、課題の設定や振り返りの場面を適切に位置付けるなど、指導方法や指導体制の工夫・改善を図るとともに、重点単元を設定した。

③ 教員の学習指導力向上のための校内研修の実施

指導力の向上に向け、国語科「読むこと」を軸にした研究主題・研究内容を設定し、全教員が授業公開を行うなど、実践的な研究を推進した。また、各種研修会への参加を奨励し、キャリアステージに応じた研修の推進に努めるとともに研修報告を行うなど、研修成果の還元に努めた。

また、先進地域への視察の成果として、大館市内全小学校が共通して取り組んでいる学びの基本ツールや備えるべき教師力、学習過程の統一などの具体的な取組について校内研修等で還元するなど、指導力の向上に努めた。



１ 大館市の取組

基盤に基づいた取組

○学習過程の統一 → 自力解決・学び合いの時間の充実
○ひとり勉強ノート → 家庭学習の習慣化
○幼小・小中連携 → 進学先中学校の約束を小学校段階で
○総合的な学習の時間→ 系統的なふるさとキャリア教育
○学びの振り返り → 学びの自覚・以後の学習へのつながり
○外国語教材 → 全小学校共通
○子どもハローワーク→ 地域・企業のイベントに参画

前提となる基盤～市内全小中学校共通

学び合いの基本ツール		備えるべき教師力
①傾聴の姿勢	②あいうえお反応	①深い教材研究と授業構想力
③ハンドサイン	④返事	②目的意識の共有と連帯感のある学級づくり
⑤声の大きさ	⑥作業スピード	③学年や教科、校種を超えた共同研究意識
⑦多様な学習形態	⑧ノートづくり	④成長力への確信とコーディネート力

城南小学校 ②対話のスキルを身に付けさせる手立て

ジョイント力の育成

発言をつなぐための言葉の例	ジョイント力	1年	2年	3年	4年	5年	6年
① まとめると～。つまり～ということですね。みんなの考えから～。	統合 結論					○	○
② 簡単からそれているので～にもどします。	修正					○	○
⑧ どうして、～になるのだろう。	疑問				○	○	○
⑦ 私は～と考えていましたが、○○さんの考えを聞いて～わかりました。私が言いたかったのはそれです。	納得/なるほど 発見			○	○	○	○
⑥ そのわけは～ なぜなら～	理由・根拠			○	○	○	○
⑤ ○○さんに質問ですが、～。	質問		○	○	○	○	○
④ ○○と○○は、仲間です。	分類・関連付け	○	○	○	○	○	○
③ ～さんに付け足します。他の言い方で言うと～	付け足し	○	○	○	○	○	○
② ～とちがいます。	ちがい	○	○	○	○	○	○
① ～と同じです。	同じ・にている	○	○	○	○	○	○

★意見を言う → 相手を見て、うなずく、反応（受け取める）

３．取組の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査による検証

平成 30 年度全国学力・学習状況調査において、国語Ａ・Ｂ、算数Ｂの平均正答率が全国を上回った。算数Ａと理科では、全道の平均正答率と同程度であった。無解答率については、多くの設問において全国平均を下回っており、粘り強く取り組む姿勢が定着してきていると考えられる。また、記述式の設問についても昨年度と比較して正答率が上昇してお

り、授業において課題や解決方法、まとめや振り返りを書く活動を重視していることが成果として現れていると考えられる。

また、児童質問紙調査においては、「家で宿題を行っている」「自分で計画的に学習している」の質問について「そう思う・どちらかといえばそう思う」と回答した児童の割合が平成 29 年度と比較して高くなっており、家庭での学習習慣について定着が図られてきていると考えられる。

(2)　標準学力検査、ほっかいどうチャレンジテストによる検証

①　チャレンジテスト経年比較

「チャレンジテスト学年末問題」における正答率の経年変化について、全道平均を 100 として前年度と比較すると、現在の第 6 学年については向上したものの、その他の学年では全道との差が開く結果となった。国語では、特に、問われていることに対して示された条件を意識して書く設問の正答率が落ち込んでいる。また、算数では、「大きな数の計算」「分数の意味の説明」「例示を基にした計算の仕方の説明」「素数の意味」「台形の面積の求め方の理解」に課題が見られた。

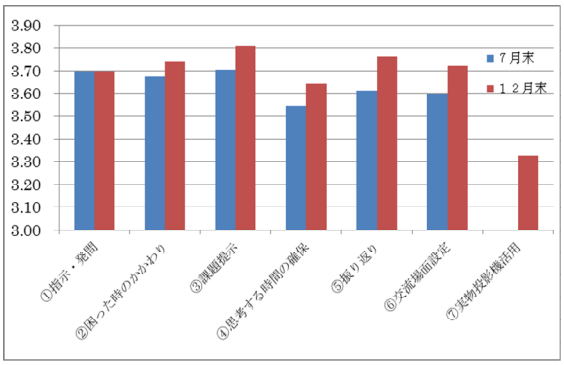
	H29	北斗	全道	全道比	H30	北斗	全道	全道比
現1年					1年国語	9.1	8.4	108.3
					1年算数	8.9	9	98.9
現2年	1年国語	8.3	8.3	100.0	2年国語	2.2	2.4	91.7
	1年算数	10.2	10.1	101.0	2年算数	6.4	7.1	90.1
現3年	2年国語	5.5	5.5	100.0	3年国語	3.1	3.7	83.8
	2年算数	8.5	9.1	93.4	3年算数	7.5	9.4	79.8
現4年	3年国語	6.7	7	95.7	4年国語	3.6	4.4	81.8
	3年算数	10.2	10.8	94.4	4年算数	8.9	9.5	93.7
現5年	4年国語	6.4	7.2	88.9	5年国語	7.5	8.8	85.2
	4年算数	9	10.7	84.1	5年算数	7.5	10.3	72.8
現6年	5年国語	11.4	12.3	92.7	6年国語	8.2	8.4	97.6
	5年算数	10.7	11.3	94.7	6年算数	11.7	12.1	96.7

本校において設定している「重点指導単元」やティーム・ティーチング、習熟度別学習の見直しを図るとともに、家庭と連携を図りながら、中学年までは復習を中心にした、高学年は予習を含めた家庭での学習習慣の定着を更に図っていく必要がある。

(3)　学校評価、児童アンケート及び教員アンケートによる検証

①　児童による授業評価（満点 4.0）

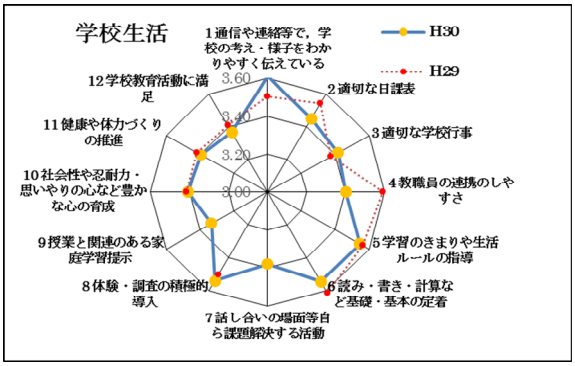
本校では学期末に児童による授業評価を実施している。本事業の指定を受け、取組内容を踏まえた上で 12 月の評価から⑦「授業において実物投影機等を活用しているか」の項目を新設した。児童の評価は 3.3 であり、他の項目と比較して落ち込んでいるのが現状である。他の項目に関しては全ての項目において 3.5 を上回っており、どの項目においても 7 月と比較して向上が見られる。



②　保護者による学校評価（満点 4.0）

12 月実施の学校評価アンケートでは、各項目において概ね昨年度同様の評価結果であった。

本事業の指定を受け、新設した「話し合いの場面等自ら課題解決する活動の導入」「授業と



関係のある家庭学習の提示」の項目については、それぞれ 3.38 と 3.33 と、概ね満足できる結果であったが、他の項目と比較すると低いため、今後は、授業参観等における対話的な学習の実施や、家庭学習につながる授業の終末の在り方等について、さらに工夫・改善を加え、保護者への情報発信を強化していきたい。

③　教師による自己評価（満点 4.0）

本校では「管内教育推進の重点マネジメントシート」を活用し、教職員の自己評価を実施している。

右の表は、学力向上に係る評価項目と結果である。

	具体的項目	H30.4	H30.9	H31.1
（1）	学校経営方針やグランドデザインに基づく学力向上に向けた組織的な取組の改善・充実により、	2.96	3.08	3.20
	学力に関わる数値目標等の達成を図る。	2.54	2.79	2.70
（2）	各種調査等の結果から課題が明らかとなった領域の繰り返し指導や毎時間の学習の振り返り活動により、	2.84	2.88	3.20
	基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	2.67	2.75	2.80
（3）	目的を明確にした話し合う活動や各教科等の特質に応じた言語活動の充実により、	2.80	2.96	3.10
	思考力、判断力、表現力等を高める。	2.54	2.71	2.70
（4）	子どもが見通しをもって学習に取り組むことができる目標提示により、	3.16	3.38	3.40
	学習意欲を高め、主体的に課題解決に取り組む態度を育む。	2.88	2.96	3.20
（5）	教職員の共通理解を図った指導の充実により、	3.40	3.42	3.60
	一貫した学習規律の徹底を図る。	3.04	3.29	3.50
（6）	家庭や地域と連携した学力向上の取組により、	2.80	2.92	2.90
	目安の家庭学習時間等の達成を図る。	2.50	2.63	2.70
9月より新設	(1)授業では、わかりやすい授業となるよう、実物投影機などICTを活用している。		2.79	3.15
	(2)授業では、加配教員を効果的に活用して個に応じた志度の充実が図られている。		3.21	3.26
	(3)放課後や長期休業期間を活用した効果的・計画的な補充学習を行っている。		2.79	2.84

12 項目中９項目（うち 3.0 以上が７項目）において、平成 30 年４月から平成 31 年１月にかけて評価が高くなっており、取組の成果が見られる。また、本事業を踏まえ、９月より新設した、ＩＣＴの活用やティーム・ティーチングの有効活用、補充的な学習等の項目についても、取組を推進したことにより教員の学力向上に向けた気運が高まってきていることが窺える。

今後は、児童の姿としての成果を十分に感じられるよう、先進地を視察した教員による研修成果の還元等から、より一層、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るとともに、思考力・判断力・表現力を育むことを目指した授業改善を推進していきたい。

４．今後の課題

今後は、以下の点を課題とし、全ての児童に育成を目指す資質・能力を育むことができるよう組織的に推進していく。

(1) 学校組織の強化

①　全教職員による全国学力・学習状況調査等各種調査結果の詳細な分析

②　校内及び校外研修のさらなる活性化を図るための組織体制の整備

(2) 個々の教員の授業デザイン力の向上

①　児童の「解決したい」という意欲を引き出す課題設定の工夫

②　児童が追究の方法や解決した結果の見通しをもてるようにするための教師のかかわり方の工夫

③　対話を通して学びを深めるための時間の確保と手立ての工夫

(3) 対話的な学びを支える資質・能力の育成

①　「立腰」等の姿勢の保持とともに「傾聴」の態度を育むための全校的な取組

②　「ハンドサイン」の導入等による対話を生み出すための学習規律の見直し

(4) 基礎的・基本的な学習内容の確実な定着

①　計画的な習熟度別少人数指導の充実など個に応じた学習による指導方法等の工夫

②　放課後や長期休業期間等を活用した補充学習の充実

③　授業内容との関連を図った家庭学習の工夫改善